

平成 28 年度 学校評価報告書 (目標設定・実施結果)

視点	4年間の目標 (平成28年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月17日実施)	総合評価(3月30日実施)	
			具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1 教育課程 学習指導	<p>①課題解決能力、プレゼンテーション能力を伸長する教育課程編成や組織的な授業改善に取り組む。</p> <p>②学校行事の企画・運営を生徒主体のものとし、生徒の社会性と実践力の向上を図る。</p>	<p>①アクティブラーニング(A.L)の視点を踏まえた授業研究と実践を進める。</p> <p>プログラミング教育推進指定の初年度として研究を進め一部実践に取り組む。</p>	<p>①職員向けA.L研修会を開催する。</p> <p>全教科科目で計画的にA.Lを導入した授業を実施する。</p> <p>プログラミング教育推進のための職員向け研修会と生徒向け特別授業を実施する。</p>	<p>①実施後、教員の理解が深まったか。</p> <p>生徒による授業評価の「生徒主体の授業の工夫」項目の平均が3.0以上となったか。</p> <p>実施後、生徒・職員の理解と意欲が高まったか。</p>	<p>①外部講師を招き「大学入試改革の視点を取り入れた授業改善」の職員研修会を実施した。また、それを踏まえた教科別の研究協議会を開き改善に取り組んだ。各科目担当者がA.Lを意識した授業を行った。</p> <p>連携企業と打ち合わせをし、情報担当教員向けの学習会を開き、今後の授業の方針を検討した。理数コースの情報の時間を中心にレゴロボットによるプログラミング教育を実施した。</p>	<p>①研修会については、次年度、生徒主体の授業の工夫がさらに進むような内容を検討し、実施する。</p> <p>来年度の情報の授業におけるプログラミング教育の実施方法の詳細案を決め、実施する。</p>	<p>①生徒一人ひとりのコミュニケーション能力が低下しているように思う。コミュニケーション能力向上を目指した指導をしてほしい。</p> <p>アクティブラーニングは、生徒自身が受け身では駄目だと気づく必要がある。評価を生徒が見て、検討していく体制にすべきだ。</p> <p>教師側がアクティブラーニングを習得しているのか。まず、教員側の研修が必要である。</p>	<p>①各科目担当者がA.Lを意識した授業を行っているが、7月の「生徒による授業評価」は半数の教科で3.0に達していない。12月については若干改善したが、まだ十分とは言えない。</p> <p>「教員の理解が深まったか」は評価の観点があいまいである。</p> <p>プログラミング教育については「社会と情報」の授業でレゴロボットを使って導入的に実施できたが、新しい分野の目標なので、よりシンプルに計画性を検証しやすいロードマップ作成が望まれる。</p>	<p>①A.L、プログラミング教育ともに新しい内容であるので、4年間継続的に検証できるよう、評価の観点を段階的に設定する。</p>
2 生徒指導・ 支援	<p>①生徒一人ひとりのニーズに応じた支援のため、教育相談コーディネーターを核とした生徒支援体制の構築に努める。</p> <p>②部活動の活性化をとおして社会性の育成を図る。</p>	<p>①支援教育、インクルーシブ教育の推進について職員全体で理解を深め、支援が必要な生徒への対応策を共有化する。</p> <p>②学校全体としてチームワークのとれた責任ある部活動の運営に取り組む。</p>	<p>①支援教育について職員向けの実践的研修会を開催する。</p> <p>ケース会議等により個別の生徒の状況を共有化する。</p> <p>②学校として部活動の規律ある運営に取り組む。</p>	<p>①実施後、教員の理解が高まったか。</p> <p>支援が必要な生徒の指導に生かせ、課題解決につながったか。</p> <p>②各部活動がルールを守り充実したものとなったか。</p>	<p>①色覚異常や性的マイノリティをテーマにした職員対象の研修会を実施し、板書の工夫や声かけなどについて理解を深めることができた。</p> <p>教育相談担当者会議を3回開催し、学年の枠を超えて情報を共有した。</p> <p>②雨天時における運動部の校舎使用規定と文化部の活動場所使用規定を作成し、顧問会議において周知した。</p>	<p>①個別支援が必要な生徒が多く、優先順位をつけてうまく対応する必要がある。</p> <p>養護教諭と担任との連携について個人差があるので、表面化しにくい事例に気づくシステム作りが必要である。</p> <p>②部活動インストラクターを希望する部が割り当てられた数より多く、調整が必要である。部活動支援ボランティア事業も活用していく必要がある。</p>	<p>①「いつ、どのように」が明示されないと今後も同じような方策や評価の観点がくり返される心配がある。特に教員がどう臨むかが示されないと支援体制の構築に向かわない。高校教育は「大学に入学するためのプロセス」か「将来の自己実現のジャンプ台」なのか生徒によって差はあると思うが将来設計的な時間があるとよい。</p> <p>②最近の西湘生はおとし過ぎ、全てに対して物足りなさがあり大変残念である。部活動においては、勝負にこだわる生徒も沢山いるので、教員が妥協せず導いて欲しい。もっとやれるはずだ。</p>	<p>①支援教育についての職員向け研修会を実施し、理解を深めることができた。</p> <p>また、教育相談担当者会議を開き、職員間で情報を共有した。SCからの情報提供の体制の確立が必要である。</p> <p>②部活動においては、雨天時における運動部の校舎使用規定と文化部の活動場所使用規定を顧問会議において、職員間で確認し、規律ある運営に取り組んだ。</p>	<p>①支援教育・インクルーシブ教育の推進についての具体的な方策を示す必要がある。</p> <p>個別の支援と全体に対する未然防止策を検討する必要がある。</p> <p>②部活動を顧問がどのように運営するかという指針をきちんと示し、部活動の活性化をとおして生徒の社会性の育成を図ることにつなげる。</p> <p>本校の特徴として部活動がとても活発であることがあげられる。今後は更に生徒のリーダーシップや主体的取り組みを充実させたい。</p>

3	進路指導・支援	①進路指導の充実を図ることで、生徒が自らの将来を積極的に開拓し、実現につなげる能力を育む。	①入学段階から自らのキャリアを意識させるための体系的な取り組みの充実を図る。	①インターンシップ等体験的・実践的活動への情報を提供し、参加を促進する。 生徒が自らの進路を積極的かつ計画的に考えることができる手引を作成する。	①インターンシップ等の参加者が昨年度比で5名以上増えたか。 生徒が進路を考えるうえで手引が役立ったか。	①インターンシップ等への参加者は前年度と同数であった。 進路の手引を作成し、面談や進路説明会等で活用した。 市主催の職業説明会であるジョブスタディの参加者が昨年比プラス18名であった。	①中間評価後、生徒にさらなる情報提供をし、積極的な参加を促した結果参加者が27人になった。次年度は、早い時期から積極的に働きかけていく予定である。	①1、2年の頃から生徒の自覚を促すよう積極的な指導をしていた。小田原には企業の研究所等多くあるので、そういう企業と夢のある勉強会ができるとよい。 インターンシップの参加者数増加を目標にするのは、現在の西湘生には、物理的(勉強・部活・塾)に無理がある。	①インターンシップ等への参加者を前年度より増加させることはできなかったが、ジョブスタディに18名参加したことで、推進できたと考える。 新たに「進路の手引」を作成し、面談や進路説明会等で活用した。「進路の手引」内容の充実を図る。	①評価の観点に、「職員が生徒に対するアプローチ」を加えられないか検討する。 生徒の参加しやすい時期等を検討していく。
4	地域等との協働	①地域や関係機関の教育力を生かした連携を推進し、地域に開かれ、地域に信頼される学校づくりを進める。	①安心・安全を主眼とした活動をとおして、地域や関係機関との協働・連携を深める。	①関係機関と連携した計画的な交通安全教育を推進する。 関係機関と連携した実践的な防災教育(DIG等)を推進する。	①生徒の交通安全に対する意識が高まり、交通事故件数が昨年度より減少したか。 生徒・教職員の防災意識が高まり、行動につながったか。	①日頃から登校指導等で生徒に交通安全を呼び掛けた。また、「交通安全高校生会議」で採択されたスローガンを全校集会で紹介し、注意喚起を促した。 NPO法人の防災組織と連携し、DIG等の研修を行い地域における被害予想を知るとともに防災意識を高めることができた。	①自転車の並走、右側通行、ながらスマホ、傘さし運転など交通安全への意識の低い生徒が多少いる。引き続き啓発活動に取り組んでいく。 生徒の防災意識には依然として差がある。DIG研修等で更なる啓発を図る。	①交通安全については、地域と連携しながら今後も強気に継続、推進してもらいたい。通学路途中の交差点は、年間を通して事故があるので注意願いたい。 自転車・歩きスマホは非常に危険なので注意が必要である。 DIGという手法は広範囲で扱いが難しいので、シンプルに明示できる方策や観点が必要である。 津波対応については、老人・障害者の対応が不十分で課題である。有事の時、学校側は極めて大変なることを認識し、「HUG」の利用を考えてほしい。	①月に3日間ずつ行っている登校指等で生徒ら交通安全を呼び掛けることで、生徒の交通安全の意識は向上していると実感できる。また、「交通安全高校生会議」等で他校や地域と連携した交通安全教育を実施した。 自転車事故の被害者数を減らす取り組みを継続的に実施する必要がある。	①交通安全の関係機関や地域との連携をもっとわかりやすくした方がよい。 自転車事故の被害者数を減らす取り組みを引き続き実施する。 災害時など、いざというときのために普段から地域との交流をもっと積極的に行うことができないか検討する。
5	学校管理 学校運営	①職員一人ひとりが意欲と責任をもって安心安全な環境づくりに取り組み、課題解決に向けて積極的に取り組む学校文化を形成する。	①校内業務における事故防止に向けた体制作りを進める。	①事故の未然防止に向けて、演習形式を取り入れた実践的な研修の機会を充実する。	①研修の実施回数及び理解度(アンケート)を高めることができたか。	①メンタルヘルス啓発講習会においてストレスマネジメント及びセルフケアについての研修を受けた。また、ストレスチェック検査を行った。	①引き続き研修を行い、意識啓発に努める。	①職員自身の肉体的精神的な健康管理も大事である。 家庭の環境の違いもそれぞれあるので、なかなか大変な事だと思うが、同窓会もうまく活用してほしい。	①メンタルヘルス啓発講習会においてストレスマネジメント及びセルフケアについての研修を行った。また、ストレスチェック検査を行った。それにより、職員の健康に対する意識を高めることができたが、休日に活動する部活動の顧問の負担軽減を図る必要がある。	①互いの健康状況を配慮し合える環境づくり、チームとしての学校運営ができるよう引き続き研修を行い、意識啓発に努める。